

(報告書)

中国の詩人杜甫と白居易の心身に飲酒が果たした役割

研究助成者：許山秀樹（静岡大学 情報学部）

1. 研究目的

李白、杜甫、白居易はいずれも大詩人であり、今日まで多くの研究がなされてきた。しかし、3人の人生で酒あるいは飲酒行為、その他嗜好品が果たした役割についての研究は、必ずしも十分ではない。酒が3人の詩のなかに多数登場するという事実は、人が生きていく上で飲酒が何らかの役割を持っていたことを示唆する。豪放な李白、憂愁の杜甫、楽天の白居易というタイプの異なる対照的な性格の3人の関連作品を比較することによって、酒、およびその他の嗜好品が人生にどのような役割を果たしていたかを知ることができる。

更に、酒に対する接し方を知ること、酒への好ましい接し方、好ましくない接し方を考えるヒントになるのではないかと考えている。李白の享年は62、杜甫は59であり、当時にあってはまずまずの寿命だが、白居易の享年75は明らかに長寿である。この長寿を達成するために、白居易はどのような生活態度を持っていたのかをこの調査から推察することが可能であろう。

本研究は酒に焦点を当てて考察するが、その延長上に、嗜好品の数々をも意識する。唐代の詩人は、酒だけでなく、多くの嗜好品とともに生きてきた。それは茶であり、また、香料、薬草も広くは含まれよう。そういったものをどう詠じてきたかを調査することを通して、人は嗜好品をどう生活の中に取り入れ、自分の生活をより過ごしやすいものにしてきたかを知ることができる。本研究は、人類幸福のために嗜好品はいかにあるべきか——それを知る手がかりを古典詩人のおびただしい作品群の中に見出す試みである。

2. 研究方法

酒に関する李白（701-762、62歳没）の現存する作品約1000首、杜甫（712-770、59歳没）の現存する作品約1400首、白居易（772-846、75歳没）の現存する作品約2900首のうち、主要なものを中心に調査する。その際、詩人がどのような状況に置かれていたか、酒をどのような心境で飲んでいたら、誰と飲んでいたら、酒が詩の中でどのような役割を果たしているか、酒がどのような表現として使われているかを調査する。この際、作品データベースを活用し、酒とともに用いられやすいキーワードの多寡を調べ、李白、杜甫と白居易の差を明らかにする。長寿をもたらす飲酒とはどのようなものかを2人の詩のなかから明らかにする。

李白、杜甫と白居易の酒に関係する作品を、年齢・官職・場所・季節・同席者・環境・

心境などの諸点との関わりを検証する。飲酒によって、詩人の心境がどのように変化しているか、飲酒がどのような役割を果たしていたかを調査する。

ここで付記しておきたい。本研究の題目は「中国の詩人杜甫と白居易の心身に飲酒が果たした役割」であり、李白の名がない。2019年8月9日の「採択者と研究審議員とのディスカッション」の席上、「中国古典詩における酒を論じるのであれば、調査対象に李白を加えるべきだ」という指摘を受けた。本研究はその意見を踏まえ、李白、杜甫、白居易の三詩人の飲酒詩を考察する。

3. 研究成果

古来、中国の文献に酒は言及されてきた。地方志と呼ばれる地域報告書のなかにも各地の酒の醸造が記されているが、詳細な製法まではほとんど言及されていない。中国の古い叢書『四庫全書』の子部「譜録類」に収められる『北山酒経』（全3巻）、『酒譜』（全1巻）の2種がまとまった文献では重要なものである。後者の『酒譜』は北宋ごろ（960年 - 1127年）の政治家竇苹（とう・ひょう）（生没年不明）の著作である。酒に関する故事などを記したものであり、中国最古の酒関連の専門書であると言われる⁽¹⁾。その記述はエピソードなどにとどまり、酒の製法に関わる詳細な記述はない。

一方、前者の『北山酒経』は「製麴造酒之法頗詳」（造酒方法の記述がかなり詳しい）⁽²⁾と評価される。著者の朱肱は北宋の進士で生没年は不詳とされるが、該書の成立は1110年頃とされる⁽³⁾。『北山酒経』では酒の歴史、存在意義、酒麴製造の理論と方法、醸造工程などが記される。この書に関して、「その造酒法は、今日の浙江黄酒の先蹤をなすものであり、その歴史を尋ねる上で貴重な資料である」という⁽⁴⁾。該書の特色の一つは、酒の効用に言及している点である。「善乎、酒之移人也」（ああ、酒は人を変えてくれる）（巻上）といい、その存在意義を理解していた。また、造酒工程にこだわりがあり、記述が詳細である。アルコール度がどの程度あったかは不詳だが、現代の黄酒と近いとすれば、15度程度はあったのではないかと推測される。。

今回の研究で取り上げる唐代の三詩人が飲んだ酒は、おそらく黄酒であり、糯米などを原料としたものである。ただ、『北山酒経』で紹介される造酒方法はかなり進んだ工程であり、その時期よりも400年ほど遡る唐代はそこまで成熟した造酒方法ではなかった可能性もあり、もう少し素朴な酒であったと考えるほうがよいと思われる。『北山酒経』の記述を参考にすべきだが、唐代の酒はそこまで洗練されたものであった確証はない。

現代の著作にも参考になるものが多い⁽⁵⁾。

4. 考察

2人の詩人を生年順に取り上げる。すなわち、李白、杜甫、白居易の順である。李白

と杜甫は 11 歳違いであり、面識もあった。一方、白居易は杜甫の 2 世代あとの詩人であり、生活環境は違っていたと思われる。「5. 結論」で少し触れるように、茶の普及度が李白・杜甫と白居易の間で大きく異なっていたと考えられ、食料品全般において種類・品質・摂取方法なども違っていただろう。「4. 考察」の冒頭で取り上げる李白の時代、酒に関する製法は、後世ほどは成熟していなかった可能性がある。

【李白】（701－762、62 歳没。杜甫より 11 歳年上、白居易より 71 歳年上）

【酒と豪快】

李白にも多数の作品が残されている。その特徴は、豪快な作品が目立つという点である。一般に酒を飲むと気が大きくなるが、李白の作品はその傾向を十二分に感じることができる。「侍郎叔に陪して洞庭に遊ぶ 酔後三首」（其の 3）に

君山を剗却するが好し（君山を削り取ってしまうがよい）
湘水を平鋪して流れしめん（湘江の水を平らかにして流れさせよう）
巴陵 無限の酒（ここ巴陵の無限の酒を飲み）
酔殺す 洞庭の秋（洞庭湖の秋景色のなかで酔いつぶれよう）

と詠う。「君山を削り取る」「湘江を平らかにする」「無限の酒」などと詠われ、スケールの大きい作品である。飲酒の持つ暗い側面が全く無く、開放的で爽快な気分になる。

剛毅な若者を描く作品にも酒が用いられる。「少年行 二首」（其の 2）に詠う。

五陵の年少 金市の東（五陵の若者 金市の東の繁華街）
銀鞍 白馬 春風を度る（銀の鞍の白馬にまたがって春風の中を進む）
落花踏み尽くして何れの処にか遊ぶ（落花を踏み尽くしてどこへ行くのか）
笑いて入る 胡姫 酒肆の中（談笑しながら入るのは碧眼の胡姫の酒場）

この詩は、裕福な家庭の御曹司の生活を詠っている。若者と酒と異国のホステスがいる酒場が描かれ、世界の中心のような歓楽街のなかの若々しく華やかな雰囲気豪快に表現されている。詩のなかに「金・銀・白・春・花」の文字が彩りを詩の内容に添えており、表現面からも豪快さ・華麗さが際立っている。

【酒と風雅】

風流な作品の中にも酒が詠じられる。「九日龍山にて飲む」詩にいう。

九日 龍山に飲めば（重陽の節句に龍山で酒を飲めば）

黄花 逐臣を笑う（菊の花が追われる身の私に笑いかける）
酔いて見る 風の帽を落とすを（酔って見つめるのは風が帽子を吹く飛ばすさま）
舞いて愛す 月の人を留むるを（舞いつつ愛でるのは月が私を引き留めること）

9月9日の重陽の節句の日に美しい風景の中、酒を堪能する姿が詠まれている。また、「族叔刑部侍郎曄及び中書賈舍人至に陪して洞庭に遊ぶ五首」（其の2）にも、

南湖秋水 夜烟無し（南湖の秋の湖面には夜にもや無く）
耐ぞ流れに乗じて直ちに天に上る可けんや（流れに乗って天上まで登りたい）
且らく洞庭に就いて月色を賒り（まずは洞庭湖で月明かりを借り）
船を將って酒を買わん 白雲の辺（船で酒を買いに行こう、あの白雲の彼方へ）

と詠じる。ここでは、親族や知人と洞庭湖で舟遊びをし、風景を愛でる様子が描かれる。洞庭湖の雄大な風景のなか、船を進ませ、白雲が漂うあたりで酒を買おうという発想が李白らしい雄大な表現にうかがえる。

【酒とそれに関わる人】

酒に関わる人々に対する視線も優しかった。「宣城の善釀紀叟を哭す」詩にいう。

紀叟 黄泉の裏（紀の爺様は冥界に行かれた）
還た応に老春を釀すべし（きっと「老春酒」を釀していることだろう）
夜台 暁日無し（しかし、あの世には朝が来ない）
酒を沽りて何人に与うる（一体誰に売るのがか）

すぐれた杜氏であった紀叟を悼んで詠んだ作品である。「老春」は酒の名である。唐代では名酒に「春」の字をつけていたと言われる。「老酒」という名を持っていたということは、上質な酒であったに違いない。なお、第3句には別系統のテキストがあり、「夜台 李白無し」とするらしい。この表現を活かせば、「あの世には私李白がいない。あんたの酒の良さを理解できる人はそこにはおるまい」という称賛の措辞であろう。ただ、主要なテキストには採用されていない。

【酒と自分との関係】

李白は酒との距離を近いものと考えていた。「湖州迦葉司馬の「白は是れ何人ぞ」と問いしに答う」詩にいう。

青蓮居士にして謫仙人（青蓮居士でもあり謫仙人でもあり）
酒肆に名を蔵すること三十春（飲兵衛として酒屋に名を留めること三十年）
湖州司馬 何ぞ問うを須いん（湖州司馬どの、何をお問いになりますか）
金粟如来の是れ後身（金粟如来の是れ後身）

自己紹介というべき諧謔的な作品の中に、「自分は酒屋に名をもう 30 年も知られている」と言うほどである。

「月下独酌 四首」（其の 1）には、酒に対する李白の考え方がよく現れている。

花間 一壺の酒（花の中、壺一杯の酒）
独酌 相い親しむ無し（独酌して相手はいない）
杯を挙げて明月を邀え（盃を高く挙げて名月に向かい）
影に対しては三人と成る（自分の影と向き合って三人となる）
月は既に飲むを解せず（月は酒のよさがわからない）
影は徒らに我が身に随う（影は私に付き従うだけ）

……

また、自分を「酒客」と称することもあった。「魯城の北范居士を尋ね道を失い、…」詩で以下のように言う。

門に入りて且つ一笑し（門に入ってにこやかに挨拶すれば）
臂を把りて君誰為るか（腕をとって誰だっけとおっしゃる）
酒客 秋蔬を愛し（酒客たる私は秋野菜が好きで）
山盤 霜梨を薦む（大皿で梨が出されている）

「酒客」は李白詩に 3 例ある。李白にとって自分は酒と切り離せない存在であったのである。

酒のよさを理解できる自分がここに描かれている。酒に飲まれず、ただ酒の長所を理解し、そのよさを存分に堪能することができるのが李白であった。

李白にとって酒の長所とはなにか。それは「月下独酌 四首」（其の 4）に述べられている。

窮愁 千万端（愁いは幾千万）
美酒 三百杯（美酒は三百杯）

愁多くして酒少しと雖ども（愁いは多く酒は少ないが）
酒傾くれば愁来たらず（酒があれば愁いは消えてくれる）

酒は「忘憂の物」（酒は憂愁を忘れさせてくれるもの）と言われるが、李白にとって酒の効用の一つは、まさに、愁いを忘れさせてくれることであった。様々な憂愁を解消してくれて、明日への活力を復活させてくれる存在が酒であった。李白にとって、酒はそこに逃げるものではなく、自分をより高めてくれる存在であった。類似する表現は他にもある。李白「友人と会宿す」詩に「滌蕩す 千古の愁、留連す 百壺飲」（長い間の憂愁を洗い流し、百壺の酒を酌み交わす）という。

【酒の魅力】

李白は酒の魅力を存分に歌い上げることに秀でていた。李白の飲酒詩を読めば、酒の持つ陶酔感を存分に感じることができる。酒を飲まなくても飲んだかのような錯覚を覚えるような作品である。その代表的なものが「客中作」である。

蘭陵の美酒 鬱金香（蘭陵産の美酒 酒名は鬱金香）
玉椀盛り来たる 琥珀の光（玉の盃に注がれた琥珀の液体）
但だ主人をして能く客を酔わしむれば（ご主人が私を酔わせていただければ）
知らず 何れの処か是れ他郷（旅人の悲哀を忘れられます）

蠱惑的な酒の美しさが鮮やかに描かれる。「蘭・美・金・玉・琥珀・光」という措辞も効果的である。酒そのものが物理的に魅惑的なものとして表現されている。

そしてその酒を飲めば、孤独な気持ちを払拭できると述べている。酒は李白にとって、爽快な気分させてくれる有益な存在であるとされている。ここに、杜甫詩にしばしば見られる陰鬱な酒のイメージは全く見られない。

李白作品における酒の特徴は、酒を称賛し、また、飲酒自体の歓びを高らかに詠い上げることが目立つ、という点である。一例で言えば、「美酒」という詩語は杜甫 3 例、白居易 7 例であるのに対し、李白は 10 例であり、作品現存数（李白約 1000、杜甫約 1400、白居易約 2900）を考慮すると、十分多いと言えよう。

李白詩には「酒を把り月に問う」もあり、以下のように詠う。

古人今人 流水の若く（昔も今も人は流水のように去り）
共に明月を看ること皆此の如し（同じ思いで月をみてきた）
唯だ願う 歌に当り酒に対する時（願うのは 歌や酒に向かい合うとき）

月光 長えに照らさん 金樽の裏（月明かりが酒甕の中を照らしてくれること）

人生を考えると、自分とともにいてほしいのは月明かりと酒であると李白はいう。酒に人生を彩る働きがあると考えていたのであろう。

【酒と交遊】

酒は交遊の場でしばしば用いられる。李白の交遊関係の詩の中でも酒は出てくるが、李白らしい特徴を持っている。「山中 幽人と対酌す」詩は名高い。

両人对酌すれば山花開く（二人が対酌すれば山の花が咲く）
一杯一杯復た一杯（酒は一杯、また一杯とすすむ）
我酔うて眠らんと欲す 卿且らく去れ（私は寝たい。君は帰ってくれ）
明朝 意有らば琴を抱いて来たれ（明日朝、よかったら琴を抱いて来てくれ）

酒を酌み交わせば、二人の交遊を称えるように木々の花が開き、そのなかで酒を何度も酌み交わす——二人の友情の高まりを美しく描いている。次々と酌み交わしたい酒の魅力と尽きることない語らいとが巧みに重ねて詠じられている。

李白は杜甫と酒席についたことがある。「魯郡東石門送杜二甫」詩にいう。

酔別復た幾日ぞ（もう何日も別れの酒を酌み交わした）
登臨 池台に徧ねし（名所にも行き尽くした）
（中略）
飛蓬 各の自ら遠ざかる（転蓬のような我々は遠ざかる）
且らく尽くせ 手中の杯（さあ、この盃を飲み干そうではないか）

李白と杜甫は、名所をめぐり、詩を詠じ、夜には酒を酌み交わした。この詩にはその篤い友情が描かれている。

後述するように、杜甫と異なり、李白には「独酌」詩が目立つ。そしてその内容も湿っぽさがない。「春、終南山松龍旧隠に帰る」詩にいう。

且つ復た酒樽を命じ（酒樽を持ってこさせ）
独酌 永夕を陶しまん（独酌して長い夜を楽しもう）

あるいは、「独酌」詩にいう。

独酌して 孤影に勧め（一人飲んで私の影に勧め）
閑歌して 芳林に面す（静かに歌って芳しい森に向かい合う）

全体として、李白の飲酒詩は、酒の持つプラスイメージを十分満喫できるような内容になっている。それは、豪放磊落と称される詩風と重なっている。

【杜甫】（712-770、59 歳没。李白より 11 歳年下、白居易より 60 歳年上）

【社交性のある飲酒】

杜甫の作品での酒の特徴は、宴席での作品が多いということである⁽⁶⁾。一人で飲むことを意味する「独酌」の語を全作品で検索すると、李白に 10 例を見出すのに対し、杜甫は 4 例を数えるのみである。類義の「独飲」も杜甫にはない。杜甫は一人で飲むことを好まず、他人と飲むことが多かったと推測される。事実、宴席での詩が多数残されており、「宴会酒」が杜甫の特徴となっている。杜甫にとって酒は、社交の手段の一つであった。では、杜甫はどのような作品を宴席で詠んだのか。印象的な作品は「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」であろう。杜甫はこのとき 37 歳で、最後に受験した科挙の試験に落ち、高位高官の有力者に対して求職活動を行っていた時期である。その一節にいう。

朝に富兒の門を扣（たた）き（朝、富豪の家の門を叩いて挨拶をし）
暮に肥馬の塵に随う（夕べには貴族の馬が蹴り上げる塵にまみれて機嫌を取る）
残杯と冷炙と（飲み残しの酒と冷めた肉をあてがわれ）
到る処 潜かに悲辛す（どこに行ってもつらい思いをいただく）

杜甫の作品には、このように、顕官らとの宴席に連なり、求職の手がかりを得ようとする態度がみられることがある。

【飲酒の雰囲気】

また、杜甫詩に詠まれた酒は、もちろん、飲酒の際のこころの開放性を詠じた作品もあるが、暗い雰囲気を帯びることがしばしばあることも特徴の一つであろう。いわば、「やけ酒」の傾向が時に見られる。「杜位宅にて歳を守る」詩は杜甫が 40 歳になる直前、官職を得ていない時に詠まれた作品である。

四十 明朝過ぎ（明日には 40 歳となり）

飛騰 暮景斜めなり (志高かった人生も終わりゆく)
誰か能く更に拘束せん (これ以上私を邪魔してくれるな)
爛酔 是れ生涯 (ただ酒びたりのみの人生を送るのだ)

酒を「忘憂物」(憂いを忘れさせてくれるもの。陶淵明の詩に由来する)と呼ぶことがある。杜甫はまさにその「憂いを晴らしてくれる存在」を強く詠じた作品が目立っている。「落日」という詩にいう。

嗥しき雀は枝を争いて墜ち (騒がしい雀は枝からこぼれ落ち)
飛ぶ虫は院に満ちて遊ぶ (飛ぶ虫は庭に満ちて遊ぶ)
濁醪 誰か汝を造れる (にがり酒を作ったのは誰)
一酌すれば 千憂を散ず (飲めばあらゆる心配事が霧消する)

類似する表現は李白にあり(「窮愁 千万端、美酒 三百杯。愁多くして酒少しと雖ども、酒傾くれば愁来たらず」)、その偶然と相違とが興味深い。しかし、李白詩の持つ屈託のない開放感は、杜甫の作品にはそれほど感じられない。

【酒と沈溺】

酒に頼ってしまい、溺れた経験もあったようである。杜甫が酒で失敗をした自覚があることは、作品からも見られる。「将(まさ)に呉楚に適(ゆ)かんとして章使君留後兼ねて幕府諸公に留別す」という作品に、以下のように詠う。

常に恐る 性 坦率なれば (思ったことをすぐ口にする癖があり)
身を失うこと杯酒の為なり (酒のせいで身を持ち崩している)
近ごろ辞す 痛飲の徒なるを (最近は飲んだくれをやめ)
節を折る 万夫の後 (みんなの言うことをおとなしく聞いている)

以上のように、杜甫はどちらかと言えば酒の力に左右されやすい体質であったようである。李白や白居易が酒そのものと冷静に付き合い、そのよさを健康的に満喫した生活をおくったのとは大きく異なると言えよう。

この詩に見られる「痛飲」という表現は杜甫詩に頻出する。他にも「薛三郎中に寄す」詩に「早歳 蘇鄭と、痛飲して情相い親しむ」(若い頃、蘇君や鄭君と、痛飲して親しくなった)などがある。「痛飲」は李白詩にはなく、白居易詩は杜甫以下の用例数である。

杜甫は、健康を害しても酒をやめなかった。「舍弟の観、藍田に赴き、妻子を取り江

陵に到り、喜びて寄す三首」(其の3)にいう。

比年酒に病むも涓滴を開かん（このごろ酒で体を壊したが少しならいいだろう）
弟勧め兄酬いれば何ぞ怨嗟せん（弟が勧め兄がそれを受けるのは楽しいことではないか）

ほかにも、「水檻遣興二首」(其の2)にいう。

浅く把る 涓涓たる酒（わずかな酒を手取る）
深く憑り 此の生を送る（これに頼って生きていく）

この不健康な飲酒行為は李白にも白居易にも見出し難い。とりわけ、酒を客観視し、それと適度な距離を持って飲んでいた白居易とは対象的な沈溺であろう。

【酒と文学】

酒と詩が持つ役割を杜甫は意識していた。「可惜」詩にいう。

心を寛くするは応に是れ酒なるべし（気持ちがゆったりできるのは酒のおかげ）
興を遣るは詩に過ぐる莫し（思いを晴らすのは詩にほかならない）
此の意 陶潜解す（この気持は陶淵明が理解してくれる）
吾が生 汝の期に後る（あなたと同時代に生きたかった）

あるいは、「哭台州鄭司戸蘇少監」詩にいう。

道消すれば 詩は興を発し（思い通りにならないと詩で思いを晴らし）
心息わんとして 酒を徒と為す（心を休めたいときは酒を友とした）

杜甫は、酒と詩の役割をはっきり理解していたことが本詩でわかる。杜甫にとって、酒は詩とともに必要な存在であり、気持ちをゆったりさせてくれる存在であった。だが、時折痛飲するなど、深くのめり込むことがあったと思われる。

【白居易】(772-846、75歳没。李白より71歳年下、杜甫より60歳年下)

【適度な飲酒】

白居易の作品に際立って見られる特徴は、ほどほどの酒を楽しむ詩が多いという点である。その特徴は若い時の作品にすでにはっきりと見られる。西暦800年(貞元16年)、

白居易 29 歳の時、白居易は科挙の試験に合格する。その際の作品に「及第後、帰親するに諸同年に留別す」がある。その一節に次のように言う。

十年 常に苦学し（十年のあいだ苦学し）
一たび上りて謬りて名を成す（最初の受験で合格してしまった）
第に擢んでらるるは未だ貴しと為さざるも（合格が尊いというわけではなく）
親を賀して方に始めて榮なり（親を祝ってあげられるのが名誉である）
……
得意 別恨を減じ（高らかな気持ちで友との別れの思いを軽くし）
半酣 遠程を軽くす（ほろ酔いで郷里への遠い道のりも気にならない）
翩翩として馬蹄疾し（馬は軽やかに進んでいく）
春日 帰郷の情（春の日、郷里を思う心情は高まる）

「ほどほどの酒を楽しむ」という心境は白居易の作品に貫かれていて、全作品中 12 例に「半酣」の語が見られる。この「半酣」は 837 年（開成 3 年）、66 歳の時の作品「新沐浴」にも見られる。

形適して外恙無く（からだは快適で病もなく）
心恬くして内憂い無し（心も落ち着いていて心配事もない）
夜来 新たに沐浴し（夜、湯浴みをし）
肌髪 舒びて且つ柔なり（肌も髪もスッキリとした）
……
先ず進む 酒一盃（まず酒を一杯飲み）
次に挙ぐ 粥一甌（次に粥をひと鉢いただく）
半酣半飽の時（ほろ酔い五分腹になったころ）
四体 春悠悠たり（私のからだは春のごとくゆったりとなる）

このように、白居易の詩は痛飲することはほとんどなく、ほろ酔い加減を楽しむ作品がしばしば見られる。

なお、この「半酣」の語は、李白詩には 2 例あるだけであり、杜甫詩に至っては 0 例である。同じ意味の「半酔」も、白居易には 4 例見られるが、李白に 1 例、杜甫 0 例である。李白の例は「口号吳王美人半酔」という詩題の作品であり、「美人」とは楊貴妃を暗示しているとされる。したがって、李白自身のことを述べたものではない。「半酣（酔）」は李白・杜甫・白居易の 3 人の中では、白居易に際立って使われた、自制心を伴った飲酒表現と言えよう。

【飲酒と交遊】

また、白居易の飲酒詩には、友人との交流がしばしば描かれる。そして、上司に当たる人物が登場することは少ない。これは上司との飲酒がしばしば見られる杜甫と大きく異なる点である。818年（元和13年）、白居易47歳の時の作品「薔薇正に開き、春酒初めて熟す。因りて劉十九・張大夫・崔二十四を招きて同に飲む」があり、よい時節を逃さず、友人と楽しく飲酒する風景が描かれる。

甕頭の竹葉は春を経て熟し（かめの中の竹葉酒は春を経て熟し）

階底の薔薇は夏に入りて開く（階段下のバラは夏に咲いた）

……

明日 早花 応に更に好しかるべし（明日の朝の花はもっと美しかろう）

心に期す 同に卯時の杯に酔わんことを（朝の酒を一緒に飲みたいものだ）

風景の美しさに調和するものとして詩を選び、それを友人とともに楽しむ態度は白居易によく見られ、その和やかな世界が白居易文学の特色の一つとなっている。

交遊は知人に留まらない。政治家であった白居易はしばしば民衆とも親しくした。「州民に別る」という作品がある。824年（長慶4年）、杭州を離れる際の作品である。そこでは、民衆が開いてくれた送別会が描かれる。白居易は杭州刺史として杭州の地で善政を敷いた。李白も杜甫も、そういう地方政治の経験が乏しかったので、このような民衆が送別会を開催してくれることはほとんど見られない。

耆老 帰路を遮り（老人たちは私の帰路を遮り）

壺漿 別筵に満つ（送別の宴を酒とともに開いてくれる）

甘棠 一樹も無し（善政の象徴である甘棠はこの地には無いのに）

那ぞ得えん 涙漣然たるを（どうして別れを悲しんでくれるのか）

送別の宴を描いた作品は他にもある。「蘇州に別る」がそれであり、826年（宝暦2年）、蘇州での作である。

餞筵 猶お未だ収まらざるに（送別の宴はまだ続くが）

征櫂 停むべからず（行く船を留めることはできない）

稍や隔つ 煙樹の色（木々に隔てられても）

尚お聞く 糸竹の声（まだ管弦の音が聞こえてくる）

杭州とともに風光明媚な地として知られる蘇州を離れるときにも、このような盛大な送別の宴を開催してもらえることを白居易も心から喜んでいたのであろう。

【飲酒と心境】

ただし、白居易にも激情の中で飲酒をすることもあった。817年（元和12年）、白居易46歳の作品に「元和十三年、淮寇未だ平らかならず、詔して歳仗を停む。憤然として感有り、率爾に章を成す」がある。その中で、以下のように言う。

歳仗を停むると聞き皇情を軫む（元旦の儀式をやめるとはおいたわしい）
応に淮西の寇未だ平らかならざるが為なるべし（淮西の乱が治まらないためだろう）
不分の気は歌裏より発し（もやもやした心は歌から生まれ）
無明の心は酒中より生ず（混乱した心は酒から出てくる）

淮西節度使であった呉少陽の死後、その息子の呉元済がその地位に居座って生じた内乱のあと、その混乱のために元旦の儀式が中止となったことに憤って詠んだ作品である。激情を抱いたまま酒を飲むことは白居易の詩の中では珍しい。ただ、それでも白居易らしさがあるのは酒の対として「歌」が描かれていることである。酒が激情と結びついたとしても、それは歌や詩とともに存在し、節度と典雅をともなったものであったことが確認できる。

白居易は、そのあざなの如く楽天的に生きたと思われるが、憂憤を抱いて過ごしたこともある。その様子が「江南謫居十韻」に見える。

草合して門に径無く（草むして門への道は消え）
煙銷えて甑に塵有り（炊事の煙も消えて鍋釜に塵が積もる）
憂えて方めて知る 酒の聖なるを（憂愁を抱いて酒の効用がわかり）
貧して始めて覚ゆ 錢の神なるを（貧しくなってお金のありがたみが分かる）

貧窮の中、その憂憤を酒で解消するしかなかったのである。白居易の人生も順風満帆ではない。自分の身におきた様々な悲しみを白居易は酒で解消していたのである。

酒が悲しみを消してくれる存在であることをはっきり述べた作品もある。「履道の新居二十韻」詩にいう。

僧至りては多く同に宿し（僧侶が来ると同宿し）
賓来たりては輒ち少らく留む（客が来たら引き止める）
豈に 詩の興を引く無からんや（興を惹く詩もあるし）
兼ねて 酒の憂いを銷す有り（憂愁を消してくれる酒もある）

白居易にとって、酒は憂愁の思いを消して、風雅な世界にいざなってくれる存在であることが自覚されている。なお、この「銷憂」は白居易詩に4例、杜甫詩に2例あり、李白にはない。白居易が憂愁の念にしばしば苛まれ、その解消に苦心していたと推察することもできよう。そして、それは杜甫も同様であった。すでに見たように、白居易が杜甫と異なるのは、酒の持つ効能をよく理解し、適度な距離を持って接していたことである。

【酒と風流】

白居易には「常樂里に閑居し、偶ま十六韻を題し……」の作品に、

窓前 竹の翫ぶ有り（窓の外には竹があり）
門外 酒の沽る有り（門の外には酒がある）
何を以て 君子を待たん（君子には何がふさわしいかといえば）
数竿 一壺に対す（竹数本と酒ひと壺）

と詠う。この詩は、友人たちと風流な遊びを呼びかけた内容をもつ。酒と対になるものは愛玩すべき竹である。単に酒に沈溺することはなかったのである。

また日本でも著名な作品「王十八の山に帰るを送り、仙遊寺に寄せ題す」詩にいう。

林間 酒を暖めて紅葉を焼き（木々のなか 紅葉を焼いて酒を温めた）
石上 詩を題して緑苔を掃う（岩の上で苔を払って詩を書いた）
惆悵す 旧遊 復た到る無きを（残念だ、かつての遊びは帰ってこない）
菊花の時節 君の廻るを羨む（菊の花咲く今日、君が彼の地に帰るのが羨ましい）

木々に囲まれて翫賞すべき風景の中、紅葉を燃やして酒を温めて飲み、その風景を詩に詠じた日々を詠じている。この「暖酒」という表現は白居易の作品の中に5例ある。李白に1例あるが、杜甫には作例がない。白居易の残存作品数が李白の約3倍であることを考慮する必要はあるが、白居易に酒をわざわざ温めて美味しく飲むことが強調されるのは、酒をより堪能したいという気持ちの現われであろう。

【飲酒と音楽】

白居易にとって酒は、耽溺するものではなかった。冷静に味わうものであった。酒はしばしば音楽とともに詠じられているのである。「香鑪峰下、新たに草堂を置き、事に即して懐いを詠じ、石上に題す」詩にいう。

何を以て我が眼を浄めん（我が目を清らかにしてくれるのは）
砌下 白蓮生ず（石段に咲く白蓮）
左手 一壺を携え（左手には酒ひと壺）
右手 五絃を撃ぐ（右手には五絃の琴）

白蓮が咲く清らかな景色の中、酒と琴とを得て、ゆったりとした気分になる。また、「七言十二句 駕部呉郎中七兄に贈る」詩にも酒と琴が詠われる。

春酒冷やかに嘗む 三数盞（春の酒を冷たいまま 数杯飲む）
曉琴閑に弄す 十余声（明け方のことを静かに しばし弾く）
幽懐 静境 何人か別る（深い思いと静かな境地 それが際立つのは誰）
惟だ有り 南宮老駕兄（南宮の駕部郎中お一人）

なお、白居易の作品に「春酒」は7例、「夏酒」0例、「秋酒」0例、「冬酒」1例となっていて、春の酒の美味さを好んでいたことがわかる。李白・杜甫も同様に「春酒」の用例が目立つ。

「北窓三友」詩にはこう詠われる。

琴罷めば輒ち酒を挙げ（琴を弾き終えれば杯を挙げ）
酒罷めば輒ち詩を吟ず（酒を飲み終えれば詩を詠じる）
三友 遞も相い引き（この三者は代わる代わる出て）
循環して已む時無し（終わるときがない）

音楽と酒と詩の三者に没頭していれば、白居易の心は満たされ、こころの安らぎを得ていた。李白や杜甫の詩を数多く調査したが、このような境地の作品は見いだせなかった。白居易の作品に「琴酒」の用例は5例を数えるが、李白・杜甫のいずれにも用例を見いだせない。「詩酒」は李白にも杜甫にもある。だが、李白も杜甫も音楽と酒とを組み合わせ、「琴酒」と表現して愛用することはなかった。白居易にとって酒は、多くの悦楽と結びつく存在であったのであろう。

【酒との距離】

白居易は酒の短所もよくわかっていた。子どもたちに言い聞かせるような作品「亀羅（子どもたちの名前）を弄す」にそれがある。

物情 小くして念う可く（小さいものは可愛いし）
人意 老いて慈み多し（年をとってくるとやさしくなる）
酒は美きも竟に須らく壊すべく（酒は美味いが結局は体を壊し）
月は円かなるも終に虧くる有り（月は丸いが最後は欠ける）

ものには完全なものはなく、よいときもあれば悪いときもある。それをわかった上で付き合うものなのだと述べている。杜甫の部分で述べたように、「痛飲」が白居易詩にあまり見られないのはその点を傍証していよう。

【酒と文学】

白居易の作品において、特に目立つのが、酒と詩の結びつきである。「元微之 浙東觀察使に除せられ、杭越鄰州を得たるを喜び、先に長句を贈る」詩に「詩酒」という組み合わせの語で詠われる。

郡楼 対いて翫ぶ 千峰の月（向き合った楼台から山にかかる月を愛で）
江界 平らかに分かつ 兩岸の春（錢塘江は兩岸の春を分ける）
杭越の風光は詩酒の主（杭州越州の風景は詩酒の主人）
相い見て更に合に何人と与にすべし（他の誰がそれにふさわしかろう）

詩と酒を翫賞するにあたり、必要なものは杭州越州の美しい風景であると述べる。「詩酒」という語は李白にも杜甫にもあるが、白居易もこの語を愛用した。

【酒の味わい方】

白居易は明け方に飲む酒を好んでいたようである。「卯」すなわち、午前6時ごろに酒を飲んでいて、「卯時酒」と題する作品はそれを詠じたものである。

仏法 醍醐を賛め（仏教は乳製品を褒め）
仙方 沆瀣を誇る（仙道は沆瀣（こうがい）という気配を誇る）
未だ如かず 卯時の酒（だが朝の酒はもっと素晴らしい）
神速にして功力倍するに（たちまち効果が現れる）

朝の酒にどのような効能があったのかは不明だが、白居易の作品には「卯時酒」「卯酒」「卯飲」の用例が見られるが、李白・杜甫には一例もないのは興味深い。白居易は単に酒を飲めばいいのではなく、どう飲めば自分にとって幸せかを注意深く考えていたと思われる。

白居易は「新酒」を好んだようである。「池上有小舟」詩にいう。833年（大和7年）、白居易62歳の時の作品である。

池上 小舟有り（池に小舟）
舟中 胡牀有り（小舟には腰掛け）
牀前 新酒有り（腰掛けの前に新酒）
独り酌み 還た独り嘗む（一人酌んで一人飲む）

白居易の作品の中で「新酒」は10例を超えるが、李白詩にはなく、杜甫詩に1例を数えるだけである。「卯酒」と同じく、白居易は酒の飲み方・選び方にこだわりがあり、自分の特性にあった飲酒を心がけていたのではないかと思われる。

5. 結論

今回、酒に絞って、中国唐代の代表的詩人、李白、杜甫、白居易の詩を調査した。「豪放な李白、憂愁の杜甫、楽天の白居易」と評される詩風が概ね、飲酒詩にも反映されていたことを確認した。いくつかの詩語（美酒、痛飲、半酣、詩酒、暖酒、春酒、琴酒、卯酒、新酒）についてはデータベースを活用し、その頻度を確認した。その際、とことん飲む杜甫とは反対に、白居易に「ほろ酔い」を愛する態度が見られたのは新たな発見であった。

1300年以上も前の詩人の寿命の長短の原因を論じることは科学的には意味がない。したがって、ここで論じることは、あくまで仮説の一つに過ぎないことを予め述べておく。3人の飲酒詩を概観すると、李白の豪放な態度、杜甫のやや退廃的な態度、白居易の適度な距離を持つ態度を看取できた。健康的な飲酒態度で言えば、白居易が最も健康的であり、李白がそれに次ぐ。杜甫は痛飲することが多々有り、体調が悪いときにも飲んでいただと思われるなど、不健康といえるものであった。李白62歳、杜甫59歳、白居易75歳の寿命を考える時、この飲酒における態度はそのまま寿命の長短と対応関係にあると思われる。当時の酒の成分や度数も不明であり、また、3人の遺伝的体質、環境などもわからない。それを無視して論じることはかなり乱暴であろう。ただ、作品から垣間見える3人の飲酒態度はそれぞれの寿命の長短に十分反映されていると言え

よう。

本研究から見えてきたことを1点補っておきたい。

白居易の詩を見ていく過程で「茶」の存在も目についた。「茶」の文字は杜甫の作品中に5例、李白の作品中に4例あるのに対し、白居易の作品中に「茶」字は85例を数える。飲茶文化の隆盛も関わるので簡単には論じられないが、それほど活動時期が離れていない白居易にこれほどの「茶詩」が急増するのは興味深い。「茶詩」の例を挙げよう。「食後」という詩題の作品にこう詠う。

食罷りて一覺の睡（食後に一眠り）

起き来たりて兩甌の茶（起きて茶を二杯）

……

樂人は日の促きを惜しみ（心がゆったりした人は時間が早く過ぎると感じ）

憂人は年の賒きを厭う（心配性な人は時間が遅く過ぎると思う）

また、「藍溪に宿して月に対す」という作品では、以下のように詠じる。

明月 本と無心（明月は無心だが）

行人自ら回首す（私は心が乱れている）

……

清影宜しく昏すべからず（この風景はシラフで眺めたいから）

聊か茶を將て酒に代えん（酒でなく茶を飲もう）

白居易は、茶の長所を知っていたようである。この境地は李白や杜甫には見出し難い。葉羽『中国茶詩』（中国軽工業出版社、2004年）には、茶を詠じた詩が多く収録されている。その書は唐の後半期の詩人たちから掲載されている。すなわち、茶を詠じ始めたのは杜甫より2世代あとの詩人たちであると考えていたのであろう。それ以前の、たとえば李白や杜甫の作品は、本書では取り上げていない。李白や杜甫から60年ほどの間に茶が普及し、それを白居易らは生活の中に取り入れていったと思われる。では、数多くの嗜好品のなかで、白居易らはなぜ茶を取り入れていったのか。彼らは茶から何を心得て心の安らぎを確保できたのか。人と嗜好品の関係を考えるうえで、多数の作品の中に人生を詠じてきた中国古典詩人を調査することは意義のあることだと思われる。この問題については、本研究（中国の詩人と酒）から派生した、申請者の今後の課題とする。

6. 引用文献

(1) ただその内容は雑知識やエピソードなどの羅列に過ぎず、四庫全書「子部九」譜録類二飲饌之属『酒譜』提要には「其書雜叙酒之故事、寥寥数條、似有脱佚」と指摘する。

(2) 四庫全書「子部九」譜録類二飲饌之属『北山酒經』提要。

(3) 宋一明訳注、『酒經』前言、上海古籍出版社、2018年。

(4) 中村喬、『北山酒經』の造酒法について：北宋時代浙江の一造酒法、『東洋史研究』、1991、50巻3号、401ページ。

(5) 酒に関する書籍は他に、言恭達ほか編、『中国酒文化大典』、江蘇鳳凰美術出版社、2014、葉叙憲、『酔与醒——中国酒文化研究（増訂本）』、陝西師範大学出版社、2019などの概論書は多い。

特定の詩人に関して論じたものとして、杜甫と酒に焦点を合わせた高正偉、『杜甫涉酒詩文輯録与研究』、中国社会科学出版社、2018がある。本書は杜甫が酒を詠じた作品を時系列に並べ、注釈を加えたもので、参考になる。

その他、酒の作品に焦点を絞った韓日明主編、『葡萄与葡萄酒古詩詞選編』、泰山出版社、2017、高建新、『酒入詩腸句不寒 古代文人生活与酒（第二版）』、内蒙古大学出版社、2016、王紅波、『千年酒風 中国古代文人与酒』、河南大学出版社、2019、李則賢、『中国歴代酒詩詞選』、伊犁人民出版社、2009、胡衛紅、『举杯邀名月 中華兩千年的飲酒文化』、国家出版社、2011、葛景春、『詩酒風流賦華章——唐詩与酒』、新華書店、2002、趙斌、『和大唐詩人对酒当歌』、上海科学技術文献出版社、2017などがある。いずれも本研究費で活用できた。

なお、P.E.マクガヴァン、『酒の起源』、白揚社、2018に興味深い指摘がある。該書によれば、9000年前の遺跡がある賈湖の出土文物を分子遺伝学の手法で調査した結果、「賈湖の醸造家たちはブドウとサンザシのワイン、ミード、米のビールを混ぜた複雑な発酵飲料を醸造できる技術をもっていたというのが、私たちの広範囲にわたる分析の結論だ（本書では、度数が九～一〇％程度と比較的高いアルコール飲料を「ワイン」と呼び、度数が四～五％程度で米などの穀物が原料のアルコール飲料を「ビール」と呼んで区別する）。」（p.69）とあり、出土文物分析によって、9000年前にすでに高いアルコール度数の飲料が存在したと推測されている。中国の酒の歴史を考える際、これは注目すべき指摘だが、現段階ではまだ定説とまではいっていないようなので、ここでは参考として述べるに留める。

(6) 高正偉、『高正偉杜甫涉酒詩文及輯録与研究』、中国社会科学出版社、2018、1ページ「在漫遊期間、杜甫的涉酒詩多写与朋友的宴飲之樂」、11ページ「在長安的前四年、杜甫的涉酒詩多投贈之作」などにその指摘がある。

7. 英文アブストラクト

The role of drinking in the mind and body of Chinese poet Du Fu and Bai Juyi

NOMIYAMA Hideki

(Faculty of Informatics, Shizuoka University)

This study discusses a representative Chinese poets Li Bai, Du Fu, Bai Juyi in Tang Dynasty. They left many poems. Among them, there are many works related to liquor. The image of liquor varies from poet to poet. I studied how poets thought about liquor.

Li Bai's poetry style is exciting. The same is true for works related to liquor. I equated myself with liquor. He highlighted the appeal of liquor. So we can fully understand the appeal of sake.

Du Fu didn't drink alone and often drowned in sake. Du Fu drunk too much liquor. Du Fu's poetry is gloomy.

Bai Juyi enjoyed drinking moderately. He liked drinking with friends. He knew how to drink liquor. He knew the disadvantages of liquor.